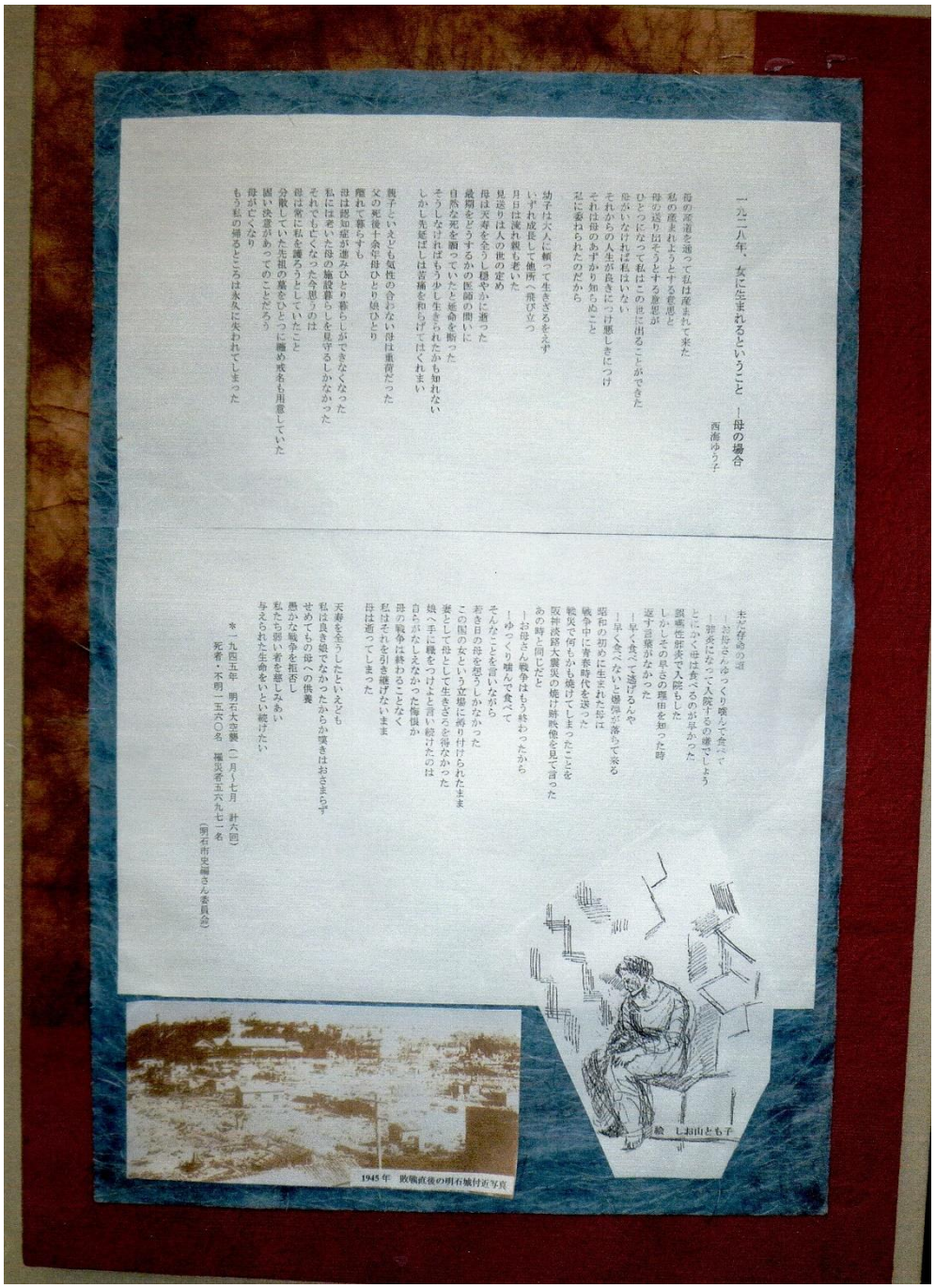
「宙（そら）」

水こし町子



一九二八年、女に生まれるということ　―母の場合

西海ゆう子

母の産道を通って私は産まれて来た
私の産まれようとする意思と
母の送り出そうとする意思が
ひとつになって私はこの世に出ることができた
他がいなければ私はいない
それからの人生が良きにつけ悪しきにつけ
それは母のあずかり知らぬこと
私に委ねられたのだから

幼子は六人に頼って生きざるをえず
いずれ成長して他所へ飛び立つ
月日は流れ親も老いた
見送りは人の世の定め
母は天寿を全うし穏やかに逝った
最期をどうするかの医師の問いに
自然な死を願っていたと延命を断った
そうしなければもう少し生きられたかも知れない
しかし先延ばしは苦痛を和らげてはくれまい

義子といえども気性の合わない母は重荷だった
離れて暮らすも
母は終知症が進みひとり暮らしができなくなった
私には老いた母の施設暮らしを見守るしかなかった
それでもとどくなった今思うのは
母は常に私を護ろうとしていたこと
分散していた先祖の墓をひとつに纏め戒名も用意していた
固い決意があってのことだろう
母がどくなり
もう私の帰るところは永久に失われてしまった

未だ存命の頃
―お母さんゆっくり噛んで食べて
―若年になって入院するの嫌でしょう
とにかく母は食べるのが早かった
誤嚥性肺炎で入院もした
しかしその早さの理由を知った時
返す言葉がなかった
―早く食べて逃げるんや
―早く食べないと爆弾が落ちて来る
昭和の初めに生まれた母は
戦争中に青春時代を送った
戦災で何もかも焼けてしまったことを
阪神淡路大震災の焼け跡映像を見て言った
あの時と同じだと
―お母さん戦争はもう終わったから
―ゆっくり噛んで食べて
そんなことを言いながら
若き日の母を想うしかなかった
この国の女という立場に縛り付けられたまま
妻として母として生きざるを得なかった
娘へ手に縫をつけよと言い続けたのは
自らがなしえなかった悔恨か
母の戦争は終わることなく
私はそれを引き継げないまま
母は逝ってしまった

天寿を全うしたといえども
私は良き娘でなかったからか嘆きはおさまらず
せめてもの母への供養
愚かな戦争を拒否し
私たち弱い者を慈しみあい
与えられた生命をいとい続けたい

＊一九四五年　明石大空襲（二月～七月　計六回）
死者・不明一五六〇名　罹災者五六九七一名
（明石市史編さん委員会）

１９２８年・女に生まれるということ

～母の場合～　　西海ゆう子

「SAIZON」（季節）

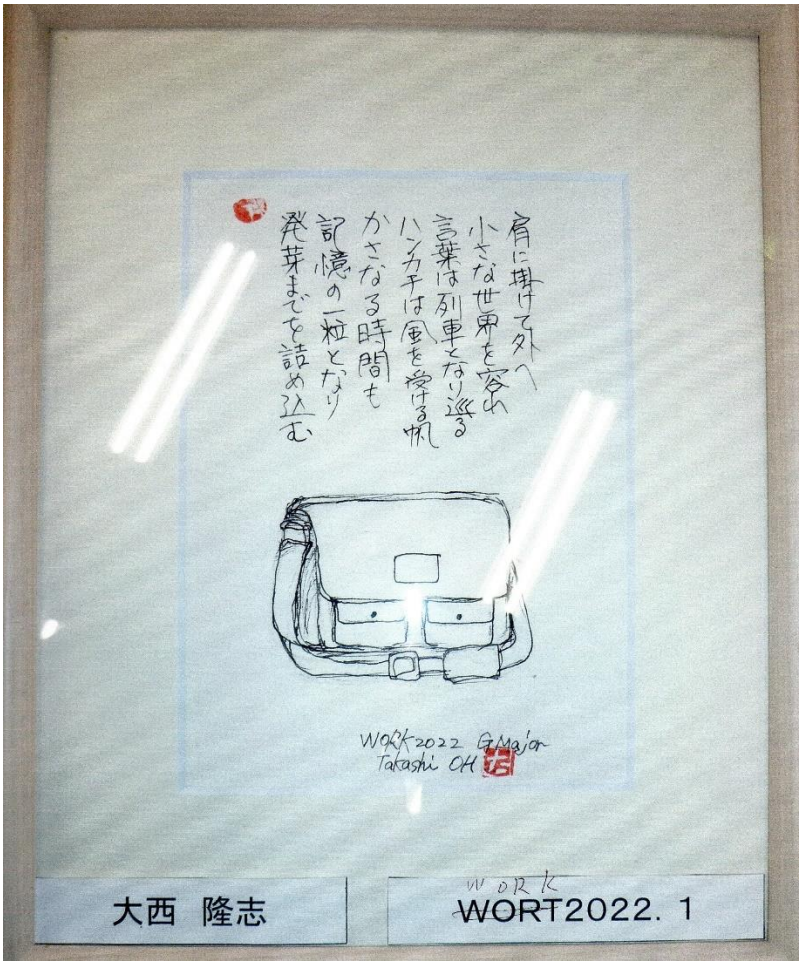
増田まさみ

「巡航するＡＬＭＡ」

大橋愛由等

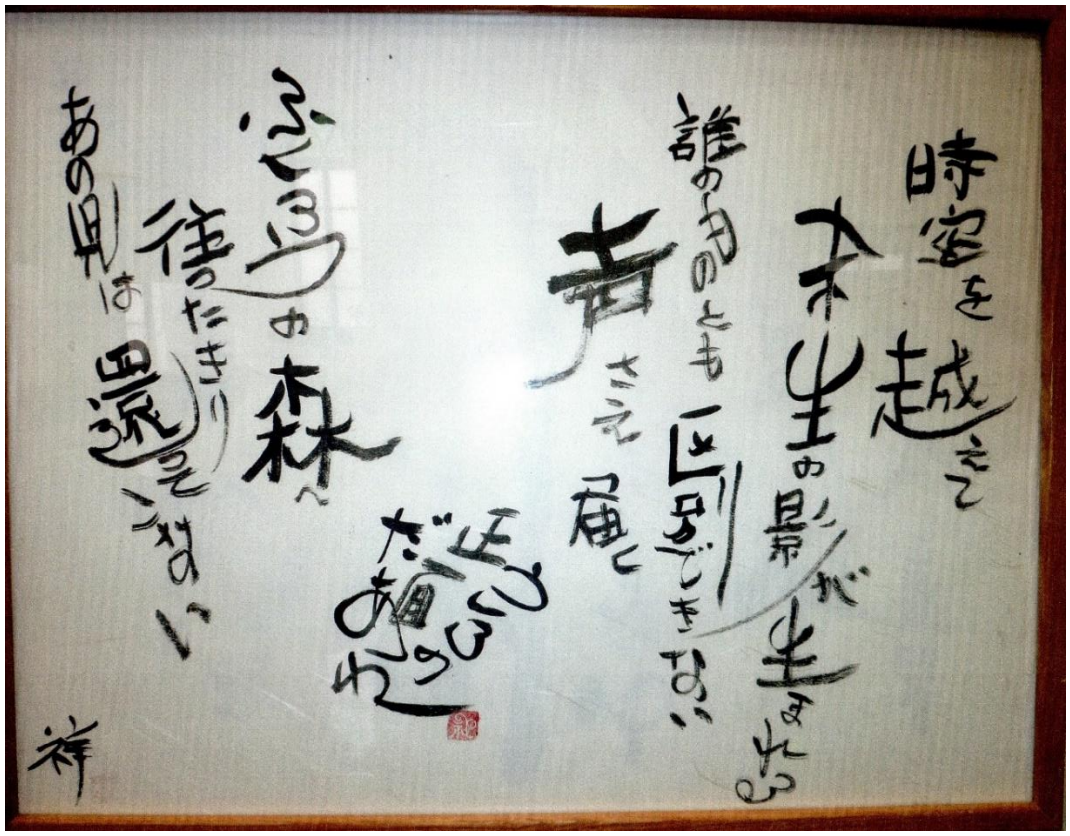
「WORK」2022.1

大西隆志



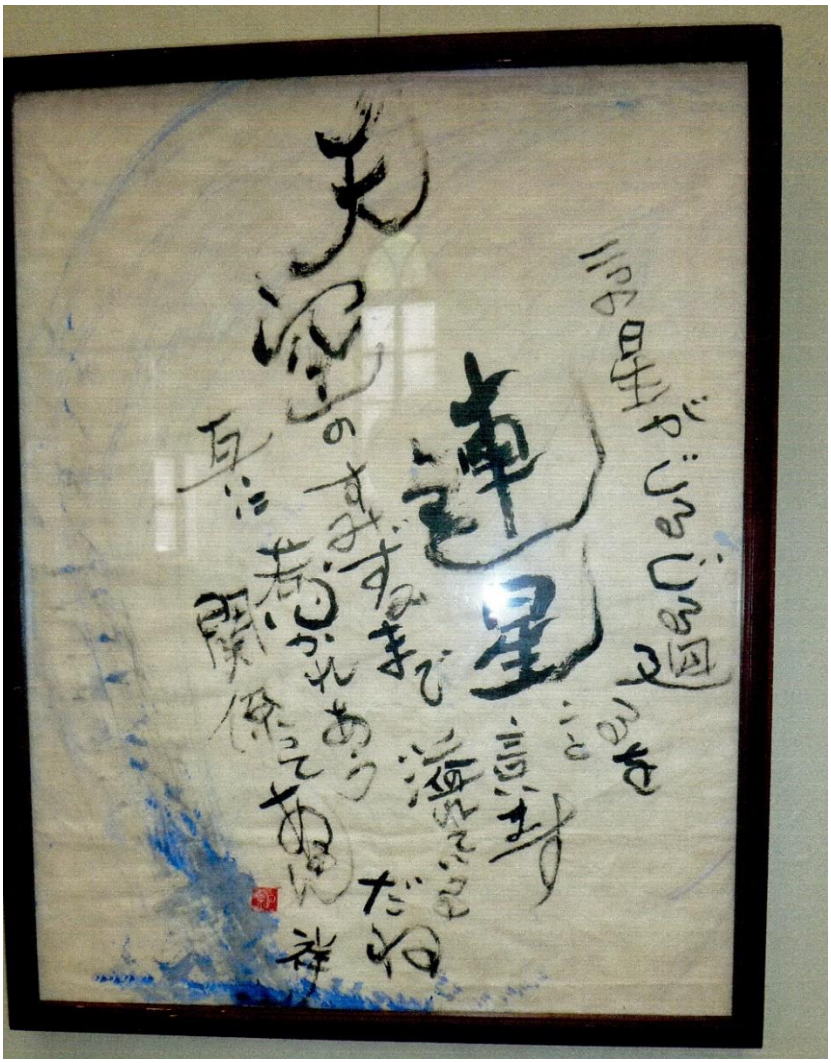
「PADAM　PADAM」

中堂けい子



「和音」

福永祥子



「引用の方程式」

福永祥子

「知らない町」

和比古

「蒼き誓い」

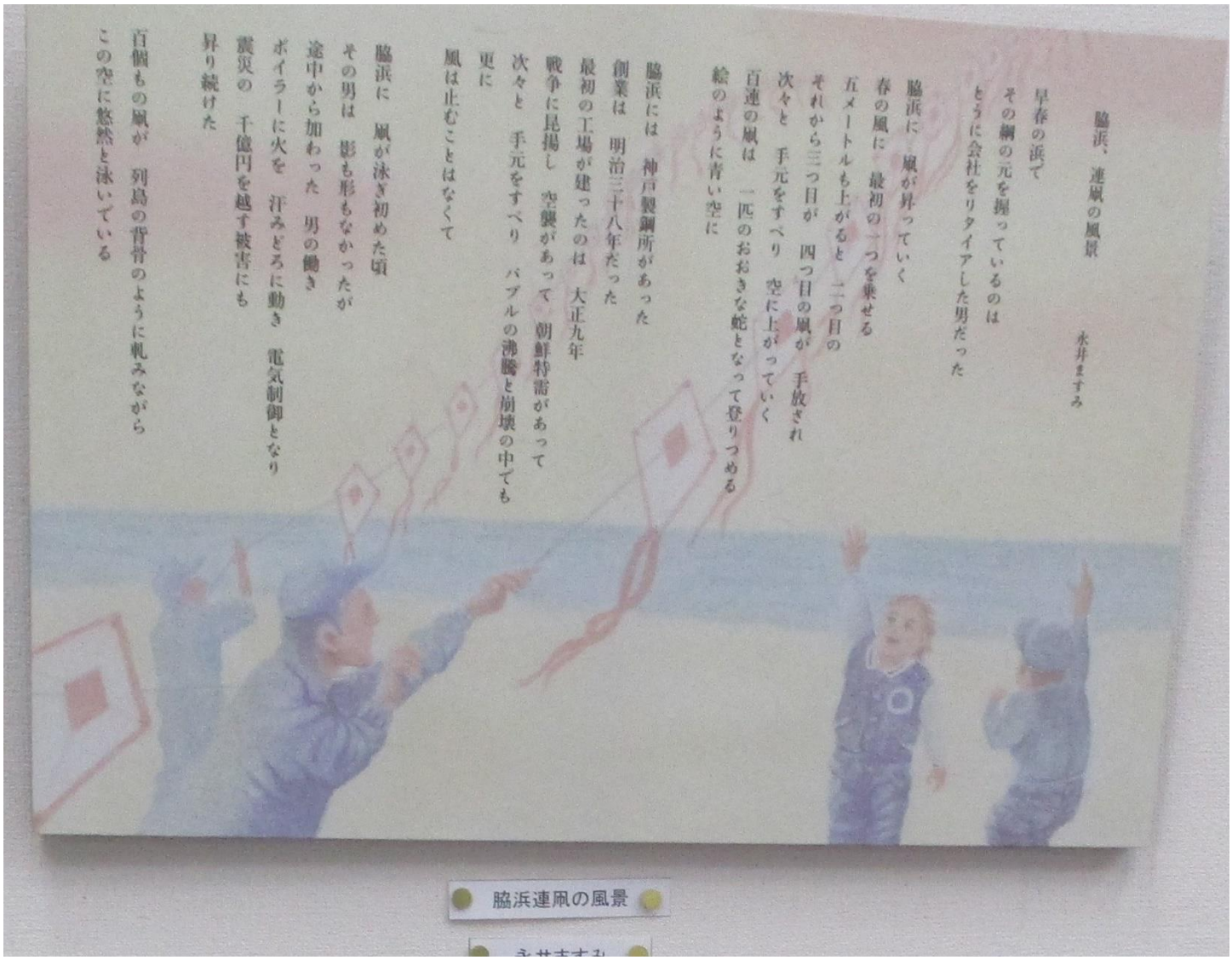
和比古

「忘れ草」（左）　（矢車草）（右）

野元正

「時を歩く」

坂東里美



脇浜、連凧の風景

永井ますみ

早春の浜で
その綱の元を握っているのは
とうに会社をリタイアした男だった

脇浜に　凧が昇っていく
春の風に　最初の一つを乗せる
五メートルも上がると　二つ目の
それから三つ目が　四つ目の凧が　手放され
次々と　手元をすべり　空に上がっていく
百連の凧は　一匹のおおきな蛇となって登りつめる
絵のように青い空に

脇浜には　神戸製鋼所があった
創業は　明治三十八年だった
最初の工場が建ったのは　大正九年
戦争に昂揚し　空襲があって　朝鮮特需があって
次々と　手元をすべり　バブルの沸騰と崩壊の中でも
更に
風は止むことはなくて

脇浜に　凧が泳ぎ初めた頃
その男は　影も形もなかったが
途中から加わった　男の働き
ボイラーに火を　汗みどろに動き　電気制御となり
震災の　千億円を越す被害にも
昇り続けた

百個もの凧が　列島の背骨のように軋みながら
この空に悠然と泳いでいる

脇浜連凧の風景

永井ますみ

「脇浜連凧の風景」

永井ますみ